久米正雄「受験生の手記」における〈圧迫〉―健吉の〈道〉と自死―

牛島　千絵美

はじめに

「受験生の手記」は、一九一八年三月『黒潮』に掲載された久米正雄の中編小説であり、初期の代表作と言ってもよい。久米の友人である二三年下の「弟」から預かった、その「兄」の手記をもとにして、読み物に仕上げたものであると作中付記に記している。当時の受験戦争にフォーカスし、一人の女性を巡って二人の男が対立する展開となっている。梗概は、前年受験に失敗し、再度一高受験に踏み切る主人公健吉が、自分よりも優秀な弟健次に嫉妬し、同時に恋愛の面で澄子を巡って競うことになる。ところが、健次は合格、健吉は再落第し、果てには澄子の想いまで健次が獲得していたことに絶望する。そうして、故郷へ帰る中途で自殺してしまう、というものだ。非常に快活な筆致でこれらの苦悩が描かれているものの、残念ながらこの作品について正面から取り上げた先行論は、管見の限りないようである。

この作品について、江口渙は次のように評している(1)。

この作で一番不満に思はざるを得ないのは最後に於ける主人公の自殺が余りにイージーすぎることである。だいいちに主人公を自殺に導くにしては、これではまだ落第の度数がたりない。否落第の度数は或はこれで充分かも知れないが、ここに書かれたる苦悶煩悶だけでは自殺に導くべく、いまだあまりに不十分である。少なくとも主人公の父兄や先輩や親類などが、主人公の再度の失敗に対していまだ何等具体的な圧迫をも加えない内から、勝手にどんどん自殺さしてしまうのは少なからず無理がある。

江口渙の言う通り、健吉の家族からは確かに、健吉を自

殺に導くような「具体的な圧迫」、例えば手紙で叱責されるようなことはまだ起こっていない。堕落を引き金にして、突発的に自死したように思われる。

しかし、健吉の自殺はそれほど「イージー」なものであっただろうか。確かに「具体的な圧迫」は加えられなかったかもしれないが、健吉を取り巻く環境が、彼を自殺に追い込むほどの〈暗黙の圧力〉を持っていた可能性があり、また健吉自身の性情にも、自身を死に追いやる要因があると考えられるためだ。

本論では、健吉の受験、恋愛に関する言動などから、健吉が自死に追い込まれるにいたる〈圧迫〉について考察する。

第一章　「外部」の圧迫

まず健吉の言動を考察するにあたって、健吉に与えられた要素について着目する。当時の社会的状況が、健吉の自己形成に何らかの影響を与えていると考えられるためである。したがって本章では、健吉の外部、家庭環境や受験等、社会的な環境を考慮しながら、主人公久野健吉がどのような状況におかれているのかをまず確認する。

健吉は自分のことを、「去年の一高の受験」で「不面目な失敗」をし、父母や姉弟、義兄からそのことで責められていると語る。実兄の存在が描かれていないため、健吉は久野家の長男であると推測されよう。そして、「親父は家が医師だから、何人医者が出来てもいゝから、三部をやれと云ふんですけれど」という健次の台詞があるため、医業を生業としている家の出であることも分かる。

よって、健吉は①医業を営む久野家の長男であり、②前年に受験に失敗して浪人中の受験生であるうえ、③受験のために上京する遊学生として描かれていることが窺える。この三つについて、作品の時代背景を通して、それらがどのような環境で、健吉にどのような〈圧力〉として関わるのか深く見ていくこととする。

第一節　家庭

久野家は、家長たる健吉の父が医者で、医業を営んでいる。父親が息子二人に対し、三部（医科）への進学を希望しているのは、この家業を継いでほしいという意志の表れである。この期待は父だけでなく、母や姉妹兄弟たちも同じように持っている。その期待を一度裏切った健吉への態度は、健吉が一節で語るように酷なものであった。この態度には、執筆された時代の家庭環境が強く影響しているといえよう。

この作品の舞台となる明治期は、特に家父長制が深く浸透している時代であった。

家父長制とは、

家長権を持つ男子が家族員を統制・支配する家族形態。家父長制家族では、一般に長男が家産と家族員に対する統率権を世襲的に継承し祖先祭祀の主宰者となる。その統率権は絶対的な権威として現われ、家族員は人格的に恭順・服従する。それは伝統によって神聖化された規範であり、家父長は伝統や他の権力の制約を受けない限り、その権力を自由に行使することができた。

という家族の形態である(2)。ここに見られるように、家族という組織において、父と長子（男子）は大きな権威を持つ存在として捉えられていることが分かる。家長は戸主を担うものと規定され、家族の生活から家産までを管理する者である。つまりは、原則的に長子である限り、家の指揮権を引継ぐ権利を得ていることとなる。

とはいえ、原則的に引継ぎが可能であっても、長子の責任能力が問われないとは限らない。特に、久野家全体を支える医業に携わるならば、医科へ入らなければ話にならない。健吉は久野家の長子であるからこそ、三部合格を当然こなさなければならない。さらに、あくまでそれは通過点である。次の家長になるはずの人間が入り口で躓いているのだから、家族が嘆くのも無理はない。

健吉は悩んだ末、三部を志望していた。写真を断ち落とす小使から、三部の倍率は十倍以上と脅される。前年に同部を受験した健吉ならば、倍率の高さも承知のはずである。しかし、彼は親の期待する三部から変更することも、弟に道を譲ることもなかった。譲らなかった理由の一つに、この家長意識が挙げられる。

このように、久野家という組織から、長子としての期待、家業を継ぐ者としての期待を受ける健吉であるが、彼の進路志望には留意しなければならない点がある。健吉は作中で一度たりとも、自身が（興味を持って）医科を望んでいるとは発言していない。それどころか、五節では「私は文科へでも行き度いんだ」と親族の前で口にしている。

そもそも、作中では澄子との関係のさらなる発展を期待するなど、一高合格を純粋な学問修得の意思で成そうとしている訳ではない様子が散見される。つまり、あくまで医科への合格はこのような家庭環境を一つの理由として強いられたものであり、健吉自身は名声や澄子への見栄のための一高合格という、より独りよがりな目標に重きを置いていると考えるべきであろう。

ただし、家という組織からの期待という〈圧迫〉を、健吉は感じている。加えて、医科を卒業することを求められる家柄であり、家業を継がなければならない事実もまた、健吉の意思とは別に、三部受験に挑ませる要因である。

第二節　受験生

この作品の題名にもあるように、久野健吉は受験生として描かれている。当時の受験生の置かれた環境、つまりは試験や、学業に対する世間一般的な考え方はどのようなものであったのだろうか。

作者である久米自身は、明治四十三年に福島県立安積中学校を卒業し、推薦無試験で一高一部乙（英文科）に入学している。作者付記によると健次がその二、三歳下であることから、健吉は久米の一、二歳年下の、明治四十四、五年の受験制度下にいる受験生であると推測される。

竹内洋『立志・苦学・出世　受験生の社会史』（二〇一五年九月十日　講談社）によれば、

> 明治三十五年から共通試験総合選抜になったのだが、明治四十一年には、再び入学試験方法が「改正」された。高校ごとの単独選抜になった。当時の文部省年報はこの改正について記述するだけで、その理由についてはふれていないが、当時の雑誌からその内幕事情をうかがうことができる。

という。

明治三十五年からの共通試験総合選抜は、志望校を第一、第二……と決め、共通の試験を各地の高等学校で受験すると、第一志望校に落第しても成績如何では第二、第三希望へ合格することができる制度であった。しかし、引用の通り、健吉の受験直前になって、再び一校単独受験、一発勝負の受験制度へ逆行したのである。ちなみに、「受験生の手記」が書かれた時点では、大正六年改正により、再び共通試験総合選抜制度へ戻っている。すなわち、健吉は選択を旧制第一高等学校にするか、しないかの二択に絞られるのである。友人の松井が依然一高を受ける意思のある健吉を褒めたとき、「自分も二高へでも落延びればよかつた」と言うが、健吉を東京に残らせたのは澄子との恋愛であり、純粋な一高への入学意欲ではなかった。そう気づいた時には、すでに名票を提出してしまっており、健吉は一高合格か二浪かの二択を余儀なくされるのである。

共通試験総合選抜制が楽であるとは一概に言えないが、そうであれば一高三部はだめでも、別の高等学校の医科へ

逃げ延びる可能性はあった。健吉はこの受験制度そのものに、自身の命運を握られていたといえよう。このように、厳しい受験制度が、健吉に一高落第ののちに希望を与えないのである。

ところで、健吉は三部以上に一高合格にこだわっている。なぜ健吉はわざわざ一高を選択していた、もしくはさせられていたのだろうか。

そもそも旧制高校には人気不人気の差があったようである。これはおそらく、学力が一高、続いて三高（京都）、二高……とおおよそナンバリングの小さい方ほど高く、大きいほど低いという特色が影響しているのだろう。さらに、一高は東京にあり、東京が日本の中でも先進的な地域として扱われる以上、そこに足を延ばすこと自体に魅力を感じるという理由もあると考えられる。

旧制高校入学は健吉が経験したように苦しい努力と運によるもので、その成功者は誰からも畏敬の眼差しを向けられる。その中でも一高に入学した者へ向けられる尊敬は計り知れない。健吉が一高受験に挑む要因は、この一高に通うことで得られる名声や恩恵の大きさではないだろうか。加えて、澄子に対して恋慕の情のある健吉にとっては、澄子の居る東京で、名誉ある一高生となることは手放しがたい夢であろう。一高に入れば来年やその先にも澄子との関係が期待できる。健吉にとって、一高への入学そのものに大きな価値があるのだ。

第三節　東京と遊学

作品の冒頭で健吉は、若松停車場発上野行きの汽車に乗っている。受験地かつ勉強生活の中心となる東京へ向かうためである。健吉は憂鬱な生活を送っていた故郷福島県を離れ、東京の千駄木にある義兄の家で暮らすことになる。よって、作中で健吉を取り巻いていた中心的環境は、この東京という土地になるだろう。

健吉は東京を「光りかがやく都会」と一節で評価している。また、澄子の居る場所として、非常に好感を持っていることが分かる。自分と同じ浪人生の立場にあっても東京に住み遊興に浸っている友人たちには、あまり良い印象を持っていない。しかし、直接東京に強い不快感を表すことはなかった。

健吉にとって東京があこがれの土地であるように、当時受験生にとって東京とは絢爛たる大都市であった。

一九〇六年発行雑誌である学生タイムス社『学生タイムス　第五号』（十月刊）内の記事「新に上京せる学生に告ぐ」には、

想ふに卿等は東京を以て学問の淵叢とし、新知識の涵源と為し、一度此地に来りて、切磋の功を積まんとを願望したりしや、夫れ久しかりけん。今や卿らは多年の願望を事実にするを得たり。卿等の足は東都の地を踏み、口に東都の空気を呼吸して、聞きしに優る都市生活の華麗は、電車あり、公園あり、広壮なる建築物繁盛なる商店あり、都人の言語の明快にして、途上の人の華美なる、而して車馬の何んで絡繹たる、業を成す真に此地にあり。

とあり、東京が受験生にとって、新しい知識の溢れ出る都市であり、健吉のいうような「光かがやく都会」として存在していることが分かる。最後の一文から読み取れるように、この地で勉強したい、勉強しなければならないというあこがれが、当時の多くの受験生たちにあったのは確かだろう。

ところが、このあと同記事では、東京という土地はそのように夢のある場所でないという戒告が続いている。

然れ共諸君よ東京は決して卿等が夢想するが如き愉快なる所に非ざる也。（中略）社会内部の混濁腐敗は、卿等が夢にだも、小説にだも未だ嘗て見ざりしものがあるなり。『濁れるもの』『穢れたるもの』とは是れ実に都市の別名也。而して東京の実質也。（中略）嗚呼此穢れに満ちたる東京に入り来りし卿等よ。卿等は寧ろ憐れむべき哉。若し卿等をして東京以外に、卿等が登龍の門あらしめば、吾人は卿等をして此穢れたる土地を踏ましめざるべきに。

また、同雑誌には、「男女学生の出入する魔窟」という記事がある。これは遊学した学生たちに、東京のどのような場所に行ってはならないかを伝えることを目的とした記事である。執筆者である菊地暁汀は、受験生は「色欲の為めに堕落し、或者は飲酒の為めに堕落し、或者は怠慢の為めに堕落」し、その中でも色欲の面で堕落してくるものが最も多いと語る。性的な欲求の抑制が学生には難しく、常に誘惑のある東京の「堕落の悪風潮に巻き」こまれると述べている。飲酒や怠慢は個人の我慢や接触を断つことで防げても、生理現象の一つである性欲を抑えることは難しい、ということだ。そして、その欲望を叶えられる場所は東京に揃っており、流されてしまうということである。

同時代の「精神修養」を掲げる研究書などには、自瀆行為が脳細胞を破壊し、記憶の混濁の原因や脳の働きを悪く

するなどの記述もある。学生はただでさえ色欲を満たすため、様々なものに触れ始める年頃であり、遊学した東京はそれらを悪い方向へ導く場所となりうる。となると、東京への遊学は堕落と隣り合わせである。遊学して住み着いた健吉の同輩などのだんだんと受験勉強が疎かになり、遊び始める様子も当然の状況であると言えよう。健吉はまさに堕落を危惧される上京学生であり、当時のこのような注意と環境に囲まれる存在である。義兄が東京に染まる前に受かることが重要であると語るのも頷ける。

ただし、健吉は上京してもすぐにはこのような快楽的な行為に手を出すことは無かった。むしろ、堕落まで追い込まれている佐藤の姿を見て、「あゝはなるまい」と嫌悪するような態度を取っている。末尾近くの貞操を失ったという健吉の絶望の様子は、それが当時の受験生たちにとって最悪の、最上の罪のように思われていた快楽を勢いに任せて貪ってしまった状況であることを考えると、過剰とも言い難い。健吉は、受験生としてあってはならない色欲の堕落を、まさに魔の地たる東京で経験してしまったのである。

第二章　「内部」の圧迫

前章では、健吉が置かれている環境を「外部」とし、それらの実態や、健吉に与える影響を確認し、それらによって健吉の進退が左右されていることを示した。健吉は家父長制に対しての反感を表すことは無かったが、酷な受験制度に対して「底から呪った笑い」声をあげたいと感じるなど、自身が過酷な状況に身を置いていることを理解している。しかし、それだけでは自殺の原因として不十分で、江口渙の言う「イージー」さからは逃れられない。

よって、ここからは前述した「外部」条件の中にある健吉が、どのような性格、行動の傾向を持っているのか、つまりは健吉の「内部」要素に着目して考察を進める。

第一節　比較による自己規定

健吉は一節で、弟と受験年が重なったことを恥じる。健吉は自己の優劣を弟に紐づけて考えるなど、たびたび自身との比較対象に弟の健次を挙げる。この比較行為の中で、健吉は「自分の位置」を確かめようとする。健吉の自己把握に、この比較という行動が重要なのではないだろうか。

健吉は健次に対し、「腑甲斐ない兄」と自虐し、同年に弟と受験する事態になったことを恥じ入るような態度をとっていた。ところが、いざ四月に健次が上京し、初めこそ都会慣れしない弟に兄や先輩としての目を向けていたが、勉強の進み具合が自分より早いと知ると、途端に対抗心と「嫉妬のような恐怖」の気を大きくする。健次の受験

を妨害することはできない。そのため、苦痛に堪えず、健吉は健次から離れ、松井の下宿する寺まで逃げるように越した。しかし、数時間格闘して解いた数学の難問を、健次はわずか五分で解くという六節での出来事が、健吉に健次との決定的な学力差を悟らせることとなった。結果、健次の合格に対して健吉は落第する。落第が分かったときも、弟の番号を咄嗟に確認する様子が見受けられる。

さらに、澄子と健次とが親近になる状況を見聞きして、澄子の件に関しても対抗心と嫉妬心を燃やす。姉から澄子は「誰とでもすぐお友達になる」女性であり、すでに健次とも親交があるということを聞き、健吉は驚きつつも、健次と澄子の関係に心当たりがあった。二人だけの秘密を抱えているような素振りに心を乱され、その一方で家庭博の引率を自分が任されると得意げになり、健次の皮肉らしい言葉を相手取らない。千駄木の家へ澄子の手紙に慰められて帰ると、健次にも澄子から祝電があったはずだと勘繰り、それを見つけ、自身の恋愛の失敗と、恋愛でさえ弟より下に置かれた、負けたことを理解する。すべての要素で兄を優越する弟の顔を見て、激しい劣等感に駆られる。

弟以外の友人・同窓との関係においても、健吉には意識的に他者と自身を比較して、何らかの要素に関して自分は相手の上か下かを設定する意識があるのは明らかである。さらに、上下が規定されると、勝利の感覚によって劣等感が払拭されたり、敗北の感覚によって嫉妬、憎悪、無力感といった感情に苛まれたりしている。

このことから、健吉は、相手のあらゆる要素を自身の要素と比較し、優劣を決定し、喜怒哀楽を左右され、そしてこのような上下関係を設ける相対化の中で、「自分の位置」の確認を、つまりは自己規定を行う人物であると考える。絶対的な自分を持たず、何らかの要素を基準にして、その優劣によって自分を位置づける形で、ようやく自分の中にその時限りのアイデンティティを落とし込んでいるものと考える。

第二節　自己防衛と逃避

次に、健吉の防衛的、逃避的な面を見ていく。

一節で列車に乗った健吉は、上京に心を躍らせる。前年度の「不甲斐ない」「不面目な失敗」に続く「陰惨な屈辱な、家での蟄居」から逃れられるためであった。前章で確認した通り、健吉の父親は医師であるために、健吉と健次両方が三部を受けることを望んでいる。

このように、健吉は実家や義兄らに面目が立たないといった、体裁を気にする節がある。捨鉢とはいえ興味のあ

る一部受験を「さうも出来ない」事と分かっており、あくまで親族の希望の通りになるように三部を再受験する。健吉は、前年の落第について、実家と義兄らに不面目な結果になったと感じているのだろう。他方で、健吉は同時にこの失敗を「殆ど当たり前の事」と開き直り、追及を不当だと感じている面もある。健吉は家族に対して申し訳ない気持ちを持ち、今年の落第は許されないとしておきながらも、内心では冷遇に対して遺憾の意を持っているのである。

ただし健吉は、不本意である気持ちを感じながらも表に出さない。あくまで思うのみである。五節で義兄に「都会風に染ま」って「心に弛みが出」ることでからかわれた際にも、反論の気持ちを押さえてその場から逃げ出すように自室へ戻った。健吉は、目に見える反発をしない、逃避的な傾向があるといえよう。直接的に相手に言い返すことはなく、ただその場を去るなどの一時的な退避行為によって、己の平安を保とうとしているのである。

さらに、健吉は自分に瑕疵があることを追及されないために防衛的になっている。

義兄と姉が弟の上京を歓迎した際に、義兄が健吉の落第の原因として、力を出し切らなかったことを挙げる。すると健吉は「元来頭も悪いんですから」と返した。その後義兄が今合格しないと東京にかぶれて難しくなると健次に伝えて、「健吉君なんぞは、さうでもありませんがね」とわざとらしく付け加えた。これに対しては席を立ってその場から逃れている。落第が分かった後、千駄木の家へ戻って姉と会話している際も、姉が気の毒ね、と声をかけると、自分の不勉強と不出来を先んじて発言する。他にも、試験の蹉跌を受験仲間や弟と共有しようとするなど、それ以上に自分のことを傷つけられまいと、先手をとって自分を卑下し、予防線を張るような言動が目立つ。または、その場から言い返さずに逃れている。実際に、義兄や姉、受験仲間はその卑下を却下して、それ以上の追及をしない。

また、この態度は、健吉の怠慢や、健次と過ごすことを嫌い松井の居る寺へと移る様子にもみることができる。健吉は苦しさと相対したとき、忍耐よりもそこから逃げることを選ぶのである。

第三節　自縛

健吉は本文中で何度も、自分に関する事柄、特に受験と恋愛について無根拠で独善的に推察したり、断言したりする。

「上京が遅れ」、「切迫した空気の中にゐ」なかったため勉強に力が入らなかったという環境的な要因を受験失敗の

理由にしてみたり、「駄目になつ」た佐藤を見て、自分はきっとこうならないだろう、と推測したりする。確かに、健吉は試験前に勉強がなかなか進まない中でも、佐藤が誘う「悪い遊び」に耽ることはなかった。健吉はあくまで、受験を一番に据える受験生であろうとはしている。澄子の手を握ったことを謝罪した健吉は、彼女の弁解に、澄子が自身に好意を持っている、と解釈する。好意があることを否定する材料は確かに存在しないが、同時に肯定できる要素もない。

十四節では、健吉は全てを失ったと考え、故郷に戻ることが最善と考える。千駄木の家には弟と澄子の関係で戻れず、佐藤の元で絶望を味わったがための選択である。確かに帰る場所を他に想像することは難しい。「又どうにかなる」という言葉からは、今のところ自分を救済する手立てがないために、一か八か帰郷した先で事態が好転することを期待している態度が見受けられる。

このような、少し自分の能力や状況から飛躍した、期待に似た推測を健吉は繰り返す。そして、積極的にこの考えを否定したり、思い直したりすることはない。これらは、健吉の恣意的、固定的な判断傾向である。一方、本文中には、健吉が自身の行動を制限する、たとえそれが危険な選択だと薄々勘付いていても変更しない、またはできないという場面が散見される。

例えば、一高合格への健吉の意欲について。健吉は一高合格に対して、「決死の首途」、再び失敗すれば「生きては帰れない」と考え、「死を前にしてそれと抗争してゐる人のやう」な努力をしていると述べる。また、健吉は、一節において父に「今年入らなければ廃す」と誓って上京を許されている。「廃す」と自分から言った以上、来年に望みを持つことは許されていない。健吉は受験合格を強く目指しているが、その失敗には前掲のごとく死を予期するような表現を用いている。しかし、付記に描かれる健次の「急を聞いて走せつけた」という様子から、家族にとって実際の彼の死が想定外の事態だったことが分かる。また、二浪する受験生の存在も、受験会場での同窓の友人たちの反応から想像に難くない。健吉は自ら、受験に失敗すれば死ぬという前途を定めてしまったのである。ただし、何度も死を予期する健吉ではあるが、実際にどれだけの覚悟を持っており、いつ自死を確約したかについては判別の難しいところである。

最後に、澄子に関しての健吉の態度を考える。

健次と澄子とが親しくなっていることを姉から聞き、また自分でもその実例に出会ったことが七節で描かれる。秘密を共有しているように見える二人に意気消沈の健吉に、

姉を通して家庭博覧会への誘いがかかる。その誘いに乗った健吉は、澄子を「疑ふまいと帰途に決心」する。このように、健吉には自分のこの先の行動を縛る傾向がみられる。

ここまで、健吉が自己規定を相対化の中でしか行えないということ、攻撃を予期して防衛的・逃避的になること、そして、過剰な自信による決めつけ・思い込みや自身の行動を制限することで前途を規定し、退路を塞いでしまう傾向があることをみてきた。第一章では健吉を取り巻く環境が彼の進退を左右していたことを述べたが、健吉自身も自縄自縛的な行動をしているのである。

第四節　正当化

第一章から健吉の状況を分析することで、彼への外部からの〈圧迫〉の正体について探ってきた。彼は家長としての責任能力を問われ、加えて受験制度によって狭き門に挑むこととなる。彼への期待は相当に重たいものであっただろう。

しかし、この〈圧迫〉の程度は、健吉が「軽蔑」されている、あるいは死を幻視するほど重いと感じるものであったかは疑わしい。

第一章で述べたように、健吉の父親は、健吉の「今年入らなければ廃す」という言葉を受けて上京を許可している。さらに、医科（三部）への合格はほぼ家業の関係で余儀なくされていても、一高への入学を父親が勧めているわけではない。「二高へでも落延びればよかった」という健吉の言葉からも、久野家が求めていたのは今年（医科に）合格することであり、一高へ行くことではないように感じられる。

健吉が一高へ合格しなければならないと考えている描写、またはその状況に置かれた表現は複数ある。なぜ前年に合格しなかっただろうと後悔する部分もある。その大部分が澄子に対しての面子の問題であり、残りは父親との約束であることが分かる。一高への入学の積極的理由は家業でもブランドでもなく、結局は恋愛の進展への期待が大部分であることは間違いないだろう。

健吉は、都合のいい場面では親や弟、ひいては家業からの〈圧迫〉を理由に一高へ入学しなければならないように考えているのだ。実際は、澄子との交際や結婚のためには一高へ入るのが最善手であるという、自分本位の理由がある。

また、健次の方は打てど響かずな様子で、健吉が隣で勉強していても、澄子と家庭博に行っても、自分の勉強の調子を崩すことはなかった。それに比べ、健吉は健次がただ

勉強しているだけで「無意識なる圧迫」を感じ、入学試験後にその話に取り合わない様子を見て、「自分よりより若きものに対する、ほとんど本能的の憎悪」まで感じている。「自然と競争の形をと」る同室での勉強に、強い嫌悪感を表していたのは健吉だけである。健次はあくまで受験に向き合っているだけで、兄を劣等とみなすような行為はしていない。健吉が、一方的に健次に対して加害の影を見ているのである。

つまり、健吉は、自己保身のために正当化を行うのである。自分は一高へ受かることを強要されているから挑んでいるだけで、一度の落第で非難されるのはお門違いである。弟は自分に対して圧力をかけ、澄子との恋愛を黙っているから、自分は澄子の好意を誤認し、失恋することになった。健吉は自分に降りかかっている状況を自分の都合のいいように受け止め、受験生だから、家が医者だから、澄子を横取りしようとするからだと、必要以上に追い詰められているように振舞う。こうすることによって、些か自身をみじめに感じるところはあっても、傷つけられている自分に攻撃的な周囲の構図を作り、責任を転嫁することが出来る。

受験の失敗も、恋愛の不成就も、ひいては健吉の怠惰と楽観視によって齎されたところが大きい。それを自責しないのは、このような正当化が健吉の中で行われているためではないだろうか。

健吉の内面を詳しく見てきたが、傾向として挙げられるのは、自分に瑕疵があると認めたがらず、苦痛から逃避するために正当化を繰り返すこと、さらには自分の考えを曲げない妄信的なさまである。

健吉は一高に合格することで手に入るものに目を奪われ、それに固執している。そのために、二高への落延びに踏ん切りがつかなかった。また、理想的な在り方を追い求めるあまりに、自分の選択肢をわざわざ狭めることになったともとれる。

健吉は絶対的な自己評価を持たず、相対化の中でしか自分の在る場所、在り方を定められないことを前述した。自分で決めたように目標にしている「一高に合格すること」も、結局は親にそれ以上責められず、自分の前年の失敗を挽回することができ、澄子との恋愛も上手くいくという理想の状況にとって、それが最善であるから取り組んでいるに過ぎない。勉強に本腰が入らないのも、苦痛であることと同時にこの理由の根の弱さがあるのだろう。

健吉「内部」の〈圧迫〉とは、その逃避的傾向と自己同一性の弱さであるといえよう。彼が逃げずに受験勉強に挑む心を持たず、「受験生」「一高生」「澄子の許嫁」といっ

た一時的な勲章やその場限りの優劣に惑わされるあまり、健吉は受験や恋愛の成就そのものに、自身の在り様を委ねてしまうのである。

第三章　導かれる健吉

さて、第一章と第二章を通して、健吉は自分の置かれた環境に撤退を制限され、自身の性情から無根拠な前途を定めるという、彼をとりまく状況が制御する彼の行く末について考察してきた。

ときに、健吉は作中で何度か、自己の将来の明暗を、己の乗る列車やそこから見える景色から読み取る。

「受験生の手記」は健吉が列車に乗るところで始まり、列車を降りて終わる。その列車や、列車から見える景色に、健吉は自身の状況を重ねて見る。このように、列車やそれに関係する諸物が、健吉の行く末の暗示になっていたと考えられないだろうか。

作中では、具体的な地名が何度か挙げられる。その中でも健吉と大きくかかわるのは、故郷福島県、猪苗代湖のある山潟、受験地である東京の三地点である。健吉はこの間を汽車で移動している。

健吉は前述したとおり、及第する受験生としての立場を前提として東京へ向かう。そうして、本来の予定としては、家族の希望通り合格して医学を修めたのち故郷へ戻って久野家を継ぎ、家長候補として認められるはずであった。つまり故郷は次期家長への期待を込めた家族が待つ地、東京は受験生として達成すべき目標のある地点であり、一高生となる場である。（さらに故郷は、澄子との婚約が成れば夫となる目標地であるとも考えられる。）

東京で受験生として一高合格のため努力することを誓った健吉は、佐藤のような遊興の輩になることも、松井のように「落延び」ることもしない。ただひたすら、受験生としてそこに在ろうとする。そして、一高合格・大学卒業後に故郷へ戻り、家族の期待通り、家を継ぐに足る人物となるはずだった。しかし、結果は落第であり、受験に失敗する。その後、澄子との恋愛も失敗に終わる。その後佐藤たちに連れられ、浅草で「不面目な一夜」を過ごして受験生としても堕落した後、全てを失ったと絶望し、上野停車場から故郷に引き返すことを思い立つ。その時、二時間ほど次の列車まで時間が空く。ところが、健吉は停車場から動くことはなく、ようやくやってきた汽車に乗った。故郷へ戻れば「どうにかなる」だろうと、失意の自身を鼓舞する健吉であったが、結局はその中途である山潟で降りてしまう。

地点移動だけで見れば、健吉は、故郷と東京の二地点間を列車に乗って移動する。受験のために東京へ向かい、落

第し、「外に行く処」もなく、故郷へ戻ろうとする。しかし、列車の中で猪苗代湖の風景を思い浮かべると、中間にある山潟で降りてしまった。

ここで、先ほど述べた、地点に託される健吉の目標を重ねて考える。健吉は福島の家の〈圧迫〉を受けながら、受験生としての成功を夢見て東京へ向かう。しかし、受験生としての成功も、一高生となる夢も、澄子の結婚相手となる願望も全て叶わず、東京から故郷へ引き返そうとする。しかし、家族に認められるには受験の成功が必須である。戻ったところで健吉は、そこで何者としての存在を許されるのだろうか。

健吉は、停車場で次の列車を待っている二時間のうちに、東京にも故郷にも居場所がないことを悟ったのではないだろうか。東京から逃れるように離れたところで、故郷の家族が失意の健吉を温かく受け入れるだろうか。前年の失敗への反応からも、処遇の冷たさは想像に難くない。

だからこそ、健吉は山潟で降りたのである。山潟は自己の目標を置く地点ではない。一節で健吉は、山潟に自身の光明を見出した。山潟で夜が明けた時、自身の成功を風景に見たのである。つまり、山潟は健吉にとって、自身の展望の明暗を示しているように感じる地であったと考えられる。十四節、山潟で降りると、一節とは真逆に夜が更けてしまっており、とても暗い。夜の湖の様子に健吉は安らぎを覚える。そうして自殺してしまった。

このように、故郷と東京の二地点とその間の山潟という構図そのものが、右往左往する将来像と、その両方の不成立による中途半端な場所での立ち往生という、健吉のアイデンティティ形成の流れに重なっている。ここまで、健吉が実際に乗った列車について触れたが、四節の「運転手の夢」という玩具の電車の見世物も、「都合よくせり上がる」橋や、「山にさしかゝ」り、上りきると「満月の口の中へ飛び込む」など、どこか健吉の受験において、父に懇願して上京を叶えた都合の良さ、一高三部という難関への挑戦とその達成のような、どこか示唆的なものとして存在する。また、「不面目な一夜」を過ごした後、どこへ行くか考えていると、足元で汽笛が鳴る。列車が鉄軌の上を凄まじい速さで過ぎていくのを見て、故郷に帰ることを思いつく。列車を見たことで戻る地を得たのである。

このように、作品内で各地点はアイデンティティ形成の目的地を示し、列車と鉄軌はその地点まで健吉を運ぶ役割を果たしている。

しかし、健吉は、自らの意思のみで汽車に乗ったのだろうか。第一章で確認したように、健吉は決して家業を継ぐ意思が旺盛なわけでも、受験に対して真摯で意欲的なわけ

でもない。上京後は受験生として清廉に在ろうと思いながら、澄子との恋愛に気を取られている。健吉を列車に乗せたのは、家庭の圧であり、時代の理想であり、健吉のプライドといえないだろうか。そして、第二章で確認したように、健吉は絶対的な自分のアイデンティティを持たず、体裁を気にして保身的に動き、反発をしない。健吉は、世の風潮に従うことが理想的であり、今更乗った道を外れることは億劫であるから、この汽車に乗り、鉄軌の上を移動しているに過ぎない。彼は、世相の作り上げた理想という〈道〉の上に、彼を取り巻く環境と退きたくない彼自身によって乗せられているだけである。

次の章では、ここまで確認してきた、世相や健吉自身が自分の辿るべきものとして敷く〈道〉とその制限について確認し、健吉が自死まで追い込まれた、もしくは自死を選んだ理由について考える。

第四章　〈道〉

前章で述べたように、本稿での〈道〉とは世間の風潮や、健吉が自分はこうあるべきと定める理想的な姿を指す。健吉は、この〈道〉を無意識的に辿るように動き、これから外れる行為をしない。

本章では、第一章から第二章で扱った、健吉を〈圧迫〉するものに触れ、これらが〈道〉であることを述べる。

第一節　前途と退路

第一章で確認した健吉を制約するものは、家庭環境と受験環境であった。長子として、家業を継ぐために三部を受けることを求められる。ここで求められている健吉の在り方は、三部に合格した、家督を継ぐに値する男子である。これが、家庭から求められている前途である。反感を覚えても、反発はせず、また受験の制度のために一高から退くことはできない。

第二章では、健吉は誰かと相対し、その中で一時のアイデンティティ形成をし、その時最善と思われる状況に、一時的に身を置こうとする傾向を述べた。さらに、自分の失敗を予測して対策したものの、全て失敗に終わってしまったことや、何度も突飛な期待をしたり思い込んだりを繰り返してはそれを裏切られるという、退路を塞いだり、塞がれたりするという状況にもあった。

この二つの章で確認したように、健吉は自身の前途という〈道〉を、周囲から敷かれ、自分でも敷いてしまっている。また、自分の行動で退路を失っている。

まず前途という〈道〉はほとんど失われる。落第してしまうことで、家族からの期待をすべて裏切ったことになる。

そして澄子を信じ抜くという〈道〉は、澄子からの「裏切り」によって無に帰してしまった。健吉からすれば、澄子は「嘘つき」となってしまったのである。健次との交際があることと落第という現実が、健吉に彼女の許嫁としての〈道〉も喪失させる。そして最後に残っているものは、一高合格が叶わなければ死ぬという前途だけであった。

死の道が残っている健吉には、後ろを見ても逃げ道はない。来年の受験に希望はなく、自分は言い訳のしようもないほど真に失敗したということを思い知るためである。なんとか最後の力で列車に乗って、健吉は鉄軌の上を戻り始める。

第二節　軌道と突堤

第三章で述べたように、列車に乗る前の二時間ほどで、健吉は自身の進退が窮まったことを認識したと考えられる。家に戻っても、東京に居ても、もはや健吉は何者でもない。しかし、他に往く処を知らないので、仕方なく列車に乗って故郷の方へ戻ろうとしている。

列車に乗った健吉は、揺られている中で猪苗代湖の湖景を思い浮かべる。そして、東京と故郷とを結ぶ鉄軌の上から、自主的に降りてしまう。降りたのはまさに猪苗代湖のある山潟であり、健吉は湖の方へ引き寄せられるように歩いていく。一面の湖の景色を眺めて心を平安に落ち着けた健吉は、暗がりの中に突堤を発見する。そして、その道を歩み、湖中へ「どこまでも」進んで引き返さなかった。

前章では鉄軌をアイデンティティ形成の場と、その場を接続する期待や風潮の象徴として取り扱った。そしてその上を健吉は、列車に乗せられて移動しているだけであった。ところが、この十四節では、揺られるままであった健吉は自らその〈道〉から外れる。そして、自身の内にあった死の前途と重なる、突堤という〈道〉の先に向かって、自分の足で歩いている。健吉は十四節まできてようやく、自分の意思で〈道〉を選んだのであり、それは同時に、残っていた「合格しなければ死ぬ」という未来像を現実のものにしたことを意味する。

健吉の途中下車はまさに、今まで強いられてきた〈道〉からの逸脱である。そして、逸脱した健吉は立ち止まるのではなく、自身の行くべき〈道〉を選択したのだった。

「受験生の手記」において健吉は、家庭や制度などの環境や己の性情が示す、理想的な在り方という〈道〉によって居場所をなくし、自身の前途を失い、列車に乗せられていた。それを途中で外れ、ようやく自力で〈道〉を見つけ、その先へ自分の足で向かい、死の前途を辿った。

つまり健吉を死に追いやった〈圧迫〉は、彼を人や自分

の望む「健吉」たらしめんとする〈道〉そのものであり、健吉自身だったのである。長子、医師の息子、受験生、一高生、許嫁、そうあるべしと定め／定められ、そのために二地点に縛られ、その間を運ばれ、他に逃げ道を許されていなかった健吉は、何者でもなくなったことで〈道〉を外れ、最後に自分の力で、自分で進路を選択することによって、何からも選択肢を左右されない久野健吉として人生の幕を閉じたのである。

おわりに

以上、「受験生の手記」における健吉が自死に至る要因を、健吉の内外や物語の示唆するものを通じて分析した。江口渙が批評で述べたように、健吉は両親からの直接的な叱責などを受けているわけではないため、表面上の「落第の度数」は、ただ二浪しただけの学生程度であるのかもしれない。

しかし、健吉を取り巻く環境が、健吉の選択肢を狭めていることは確かであった。三部合格は久野家の望みであり、部の変更は「さうも出来ない」ことである。家族の失望を買うために三部合格を諦めることは難しく、さらに一高合格を諦めることは同時に、前年の失敗を挽回出来ず、澄子にも失望される状況を招きかねない。東京という土地は健吉ら受験生を誘惑し、その中でも性的な事物は彼らの頭を鈍らせる脅威であった。健吉はこれらの誘惑を嫌悪していたものの、十四節でこれを経験し、受験生として最悪の堕落をしてしまう。これは健吉の、清廉な受験生として在ろうという意識に大きな傷を与えてしまった。

さらに、健吉の性情が自らを追い込んでいく。健吉は自分の在り方を周囲や状況に左右され、他者との比較によって自分の価値を定めていた。このようなアイデンティティの弱さが、健吉に〈道〉の上を歩かせる要因であった。また、体裁を気にして、自分は追い込まれているかのように振舞い、責任転嫁をすることで自分の怠慢や油断を覆い隠している。そうして自分を守りながら、自分にとって最善である〈道〉を選び、それをなぞっているに過ぎなかった。その通りに動いているうちは、自分は安全に望みを達成でき、他者から責められることもないためである。

列車や各地点が、彼の右往左往して定まらない在り方を暗示しているといえよう。彼はやはり、〈道〉の上に乗るのが理想的であるから、その道を決して外れない列車に乗っている。そこから降りると、その選択には責任が伴い、自分の在り方を、自分で決定する世界が広がっている。健吉は最終節で、その世界に降りることとなった。受験生や

許嫁として成功できるはずであった東京と家長として認められるはずであった故郷、そのどちらでもない中間地である山潟に、自分の足で立つこととなる。そうして、健吉は自身の〈道〉を、自分で探し当てる。それが、猪苗代湖の突堤であり、死の前途だったのである。

健吉を追い込んだ〈暗黙の圧力〉は、環境によって導かれる「理想」であり、同時に自身の在り様をそこに委ねてしまう、健吉自身の弱さであったといえよう。健吉は突堤を進み、不合格に結び付けた死の前途を達成した。同時に、何かと比べることも、自分の得る利益や不利益などを考慮することもなく、純粋に久野健吉の意思で進路を選んだ瞬間になった。久野健吉としての始まりは、皮肉にも死という久野健吉という個人の終わりと重なってしまったのである。

注

（1）江口渙「三月の創作」『帝国文学』一九一八年四月一日

（2）項目：家父長制　山本英治　見田宗助・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂　一九八八年二月